

(別紙 2)

論文審査の結果の要旨

氏名 久野康彦

久野康彦氏の論文「革命前のロシアの大衆小説」は、19世紀後半から20世紀初頭のロシア文学の特質を大衆小説の考察を通して明らかにしようとしたものである。

ロシアでは1860年代以来読者層の拡大、出版産業や大衆メディアの発達などに伴って、大衆小説が読者文化において一際大きな役割を演ずるようになった。今日その多くは忘れられてしまっているが、革命前のロシア文学とロシア文化の状況を知る上で必要不可欠の資料であることは間違いない。

久野氏は本論文において、大衆小説が果たした役割を当時の文化的コンテクストの中で論じた後、生産されて数量においても注目度においても特に重要であったと思われる三つのジャンル、即ち「探偵小説」「オカルト小説」「女性小説」を分析した。三つのジャンルにはそれぞれ一章が捧げられており、個々の章はジャンルについての説明と先行研究の紹介に始まり、数名の作家の活動及び代表的な作品について論述するという構成をとっている。まず「探偵小説」に関しては、1870年代にアルシャルーモフ、パノーフ、シクリャレフスキーが本格的な探偵小説を発表し、それが革命前のロシアの大衆文学の主要なジャンルとして発展していった経緯を明らかにする。推理の要素ではなく犯罪捜査過程に力点が置かれる点、また犯罪者の心理の記述が重要である点に、ロシアの独自性があることが指摘されていて、興味深い。次に「オカルト小説」に関しては、アンフィテアートロフ、クリジャンノフスカヤ等の作品の分析を通して、19世紀後半に西洋で流行したスピリチュアリズムの影響、ロマン主義の伝統や同時代の精神病理学との結びつきが検証されている。女性が書き手であり、女性独自の視点を反映させた小説としての「女性小説」を扱った章では、20世紀初頭のロシアの女性小説はシリアスな文学と大衆小説の境界線上に位置していたという点で独自の特徴を持つことが指摘されている。

本論文はロシア文学を代表する巨匠たちの創作活動と深い結びつきをもちながら、これまで注目されることの殆どなかった作品を詳細に分析、紹介しており、ロシア文学研究における貢献は極めて大きい。また大衆小説が19世紀末のロシア社会において果たした役割についても論じており、ロシアの伝統的文化が新しい社会に受け継がれていくメカニズムを理解する手がかりを与えている点でも、意義が大きいと考える。

審査の過程では、大衆文学を扱う方法に関して今少し配慮が必要ではないかとの意見や、個々の大衆小説の考察の上にどのような時代的展望が得られるのか明確な指摘がほしい、等の希望も出された。しかしこれらの指摘は本論文の本質的な欠点を意味するものではなく、むしろ本論文の成果に基づく今後の研究に対する期待の大きさを示すものであった。以上のような評価に基づき、審査委員会は全員一致で、本論文が博士(文学)の学位に充分値するものであるとの結論に至った。